

同窓会大会開催！

2009年8月1日（日）

13：00～15：00

メルパルクHIROSHIMAにて

8月1日土曜日、広島大学総合科学部創立35周年記念同窓会大会が、広島市中区基町のメルパルクHIROSHIMAで開催されました。

13時の開会宣言に続き総会が執行され、前延国治総合科学部同窓会長（環境科学コース・51生）により報告が行われました。



乾杯の様子

た。次に、前延同窓会長、榎原修総合科学部長、尾形幸雄広島高等学校同窓会長の順にあいさつを述べました。そして、乾杯の後、飲食・歓談の時間となりました。

14時には、午前中に福山で所用のあった浅原利正広島大学長も会場に到着され、あいさつの後には広島大学や総合科学部の歴史に関するDVDの上映がありました。

まず上映されたのが、「広島大学 統合移転地を訪ねて～昭和51年10月～」という映像です。これには、東広島市の土地環境



DVD上映中

が紹介されていました。続いては「新キャンパスの建設を目指して 広島大学」という映像です。これは昭和55年に制作されたもので、内容はキャンパス移転計画についてでした。ちなみに、これら2本は当初上映の予定がなかったそうですが、お宝映像として流されました。その後、大学の倉庫から最近発見されたという1970年代の広島大学の映像「フェニックスへの路」が流されました。オリエンテーションキャン

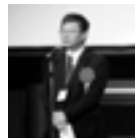
プや千田キャンパスの懐かしい映像もあり、会場では、あまりの懐かしさにかあちらこちらから歓声が上がっていました。そして最後を締めくくるのは、30周年記念大会のために制作された「プロジェクトPhoenix」です。「地上の星」「ヘッドライト・テールライト」のメロディーにのせて総合科学部の歴史が紹介され、その奥深さを再確認しました。



どこかで見たような…！

DVD上映の後、広島大学グッズの抽選会がありました。賞品には現役生にも馴染みのキューピーストラップなどがあり、会場は終始和やかな雰囲気になま

●報告と開会あいさつ

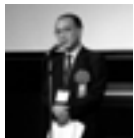


総合科学部同窓会長
前延 国治 様

同窓会では皆様の情報をもとに同窓会名簿を作って、「同窓会便り」などの色々なお知らせが届くようにしている。総合科学部は今年で35周年を迎え、名簿の管理が難しくなったりなどの問題もあるが、まだまだ若い学部、そして今後の発展が期待される学部ということで、同窓会の活動をこれからも継続し、40周年記念大会も開きたい。また、同窓会のHPやメールがあるので、「同期で集まりたい」「こんなことをしてほしい」という意見があれば、ぜひ提案をお願いしたい。それをもとに、色々な人が集まりやすく、色々な仕掛けのある行事を行っていく。

今日は久しぶりのメンバーが集まった。思い出話や近況報告に花を咲かせてほしい。また、今年は広大の創立60周年の年でもあり、11月7日に行われる「ホームカミングデー」でも様々なイベントが予定されている。ぜひ参加していただきたい。

●来賓あいさつ



広島大学長
浅原 利正 先生

広島大学は昭和24年に8つの学校を併合して新制大学として設立されたが、総合科学部は昭和49年に設置された。それ以来、総合科学部では学際領域において優れた教育がなされ、その業績は広島大学の誇りとするところである。近年、「教育の質の保証」が高く求められているが、総合科学部で培ってきた教養教育を改めて見直して充実させていきたい。これについて現在検討を進めており、この秋の教育研究協議会にはその草案を提出する。先輩方の築いてきた伝統を守り、レベルの高い教育を行いたい。

広島大学総合科学部創立35周年記念

した。編集委員
3人もキーホル
ダーなどが当選
しました。

そして、第4

代総合科学部長
である天野實先
生が閉会のあい

さつを述べ、先生の音頭により「安芸の国」という歌が歌われました。元気で威勢のいい歌声が会場中に響き、総合科学部の卒業生が一つになった瞬間でした。しかし、取材した私たちや比較的若い参加者は何が起こっているのか分からない状態で手拍子を取っていました。一定の年度より前の卒業生にはなじみのある歌のようです。また、「総科節」「総科音頭」という曲もあるそうです。「安芸の国」については、後ほど詳しくご紹介します。

最後に参加者全員が壇上に上がり記念写真の撮影をしたところで、同窓会大会は再開になりました。退場時には、総合科学部同窓会のオリジナルマグカップやクリアファイルの入った「ひろだいそうかはせかにひとつ」のロゴ入りの白い紙袋を受け取り、名札を返却して会場を後にしました。



浅原学長による抽選

今回の取材は
林田啓誉・平野
詩歩・山谷義貴
が担当し、飲食・
歓談の時間や大
会終了後に先生
方や参加者の皆
さんにインタ



浅原学長にインタビュー

ビューを行いました。

また、午前中には統合移転前の主要キャンパスだった千田キャンパスの跡地である東千田公園を散策しました。旧正門のフェニックスの木や門柱、森戸道路や旧理学部1号館は当時の姿を留めていましたが、総合科学部校舎のあった場所には高層マンションが立ち並び、当時の面影に触れることはできませんでした。



総科跡にはマンションが



旧正門から公園内を望む

総合科学部長

榎原 修 先生



前回（30周年記念）の大会後、大学院総合科学研究科が設置され、すでに博士課程の修了生も出ている。そのように、変わった点もずいぶんあるが、総合科学部の教育の在り方や学生との関わり方は変わらない。今日は退職された先生方も多く出席され、むしろ現任教員の出席者の方が少なくて申し訳なく思うが（二重笑）、そのように、先輩の先生方が学部に関心を感じ、忘れずにいてくださることが大変ありがたい。卒業生の皆様においても同様である。今後、40年・50年・60年と続けてご出席いただきたい。

広島高等学校同窓会長

尾形 幸雄 様



広島高等学校などの旧制高校は、大学の専門教育を受ける前に必要な教養教育を行い、「教養エリート」を育ててきた。これこそ、総合科学部の教育理念である「自由なカリキュラムによる総合的な知見と思考力の涵養」「新しい境界領域の研究」「国際社会の理解」「新しいジェネラルのエデュケーション」と一致するものであった。そんな総合科学部が、「ひろだいそうかはせかにひとつ」の心意気を大切にし、ますます光を増して発展することを心から祈念している。

●閉会あいさつ

第4代総合科学部長

天野 實 先生



私の取り柄は、声が大きなことと、あいさつが短いことである（一同笑・拍手）。これから、「安芸の国」をみんなで一緒に歌いたい。

先生方・参加者の声

●総合科学部同窓会長 前延国治様

【学生へのメッセージ】

偉大な先輩たちの後に続いてほしいということ、これに尽きます。既存の道だけではなく、自分自身の新しい道も切り開いていくことが、総科生の持つべきパイオニア精神ではないでしょうか。

●広島大学長 浅原利正先生

【学生へのメッセージ】

以前東京で広島大学の卒業生が集まる機会があったのですが、マスコミ関係に就職した人を見ると、総合科学部の卒業生が多かったです。文理を共に学べる「総合科学」は教養教育に最適な学問であり、新しい話題についていける学問でもあります。「総合」をもっと生かしてほしい。そして、志を高く持ち、思いやりを忘れずに生きてください。

●総合科学部部长 榎原修先生

【学生へのメッセージ】

総科生が持っている能力はとても大きなものです。しかし、まだそれが十分に活かせていない面もあると思います。単に「授業のため」などではなく、興味を持ったことを自分で広げるために一生懸命勉強し、その能力を活かしてください。

●広島高等学校同窓会長 尾形幸雄様

【学生へのメッセージ】

広島総科の名に恥じないよう、しっかりと勉強をしてください。

●北村浩司さん

【参加しての感想】

初めて参加したんですが、こういう機会があるのはいいことですね。連絡を取っていただいた仲間と再会できて良かったと思いますし、総科のフロンティア精神を改めて確認できたことも収穫でした。



●正司さゆりさん

【学生へのメッセージ】

私は大学時代、やりたくてもできなかったことがありました。だから皆さんは、大学生のうちにしかできないことをやって、大学生活をエンジョイしてほしいと思います。



●八島三哉さん(旧姓・宮崎)

【飛翔について】

実は私も飛翔編集委員でした。1年生が全員やめて、委員が8人になり大変だったという思い出があるのですが……。飛翔が今も続いていることを嬉しく思います。これからも頑張ってください。



●高野裕介さん

【学生へのメッセージ】

大学生のうちは、やりたいことを思いっきりやってください。また、総科では文系・理系の枠を超えた教育がされているから、社会に出た時、会議などで両方の分野の話が出た時にも意味が分かります。これは有利なことですよ。



取材を終えて

エレベーターで会場のフロアに降り立つと、スーツを着た人がたくさん。会場に入ったら、どこに座ればよいのかわからずオドオド。乾杯しようにもビールしかない。こんな右も左も分らない環境で取材するのは私たちにとって初めてのことでしたが、無事に取材を終えることができ、まずはほっと胸をなでおろしています。

また、先生方や参加者の皆さんへのインタビューを通じて、総合科学部の絆の強さのようなものを改めて感じました。私たちももっと積極的にこのような会に参加し、総合科学部生のネットワークを広げていけたら良いと思いました。

最後になりましたが、この記事をまとめるにあたり、インタビューに応じてくださった皆さん、大会後に「安芸の国」についての情報を提供してくださった皆さん、私たちの集合写真や風景の写真を提供してくださった皆さんなど、たくさんの方にお世話になりました。本当にありがとうございます。

【担当】 20生 山谷 義貴

21生 林田 啓誉・平野 詩歩



総科版「安芸の国」はこうして生まれた

まず、表題の答えを書く。

この歌詞が生まれたのは、1978年の10月上旬。場所は四国最高峰、標高1982メートルの石鎚山の山頂付近である。私が大学1年の時、ワンダーフォーゲル部の秋合宿の登山中につくった。要はワングルに伝わる歌「安芸の国」をパクッて、歌詞をすり替えたのだ。

◇

ここは安芸の国、広島の町よ

広島町なら大学は広大

広大来るなら総科にしやんせ

夢あり希望ありコンパあり

コンパばかりで過ごしはせぬが

酒のみや友達増えていく

友達増えても恋人は出来ぬ

それが総科に来た誤算

五三三と我らと呼ぶな

誤算は進歩の母なりき

母ちゃん父ちゃんを故郷に残し

やって来ました安芸の国

秋も深まり、霜月の初め

我らの力をためすとき

我らの力にや、果てはない

我らの心にや、恥もない

恥も外聞も忘れて動く

それが総科の旗印

広大総科は世界でひとつ

世界にはばたけ総科生

〈リフレイン〉

◇

それにしても拙い歌詞である。まず、方言を間違っている。遊女が使うような「しやんせ」とは、一体どこの方言か。広島なら「しんさいや」だろう。

8月初め、飛翔の担当の学生から「安芸の国の作詞のルーツを書いて欲しい」と電話がかかった。

いま勤務している朝日新聞阪神支局の自席のパソコンで、すぐにフレーズを書き留めた。加齢による物忘れがひどくなっているのに、31年前の記憶はするすると出てきた。

びっくりしたのは、この歌が今でも総科の同窓会で歌い継がれていると聞いたときだ。大学のホームページをのぞいて知ったが、総科の玄関の石碑に「ひろだいそうかは せかいにひとつ」という文句まである。一部、「てにをは」が違うが、「安芸の国」の歌詞を採用してくれたのなら光栄である。あの歌詞は、石鎚の登山路で考えついた。大学祭が目前に迫り、総科の53生の歌を早くつくらねば、というあせりがあったように思う。

青春だった。

70年代はまだ、広島町の、広大生の無礼講を許していた時代だった。その許容の幅が最も

「安芸の国」の作詞者、中村正憲様（朝日新聞阪神支局長）よりご寄稿いただきました。

広がったのが、11月3日の市中パレード。東千田町のキャンパスから仮装した集団が町に出て、本通りでパフォーマンスを繰り広げ、大学に戻る。昭和53年に入学した当時の総科生達は、可部の山奥で切り出した竹を材料に、巨大な不死鳥を築き上げた。それを「みこし」としてパレードの中心に据え、本通りでは一升瓶を回し飲みし、氣勢を上げた。

極めつけは、全員が肩を組んで歌った「安芸の国」。その周囲は、まるで、カーブが優勝した時のようなテンションだったに違いない。きつと、いまなら110番通報され、きついお仕置きを受けたかもしれない。町が大学生に優しかった時代が、実に懐かしい。

ときの文部省が進めた、統合移転という「学生運動」封じ込め政策は、東の筑波大と同様、成功したのだろう。だが、いまの広島市街の無味乾燥さを見るにつけ、広大の西条移転とともに失ったものは計り知れないように、私は感じる。

孤独や挫折や失敗や誤算。広島市の雑踏の風景とかぶる、そうした青春の「負」の記憶が、記者になった私の原動力になったことは間違いない。あの年の秋、肩を組み、安芸の国を歌った仲間達もきつとそうだったのではと考える。

（朝日新聞阪神支局長 中村正憲）